

## はねっこ残照

盆踊りは、日本の伝統文化として古来から受けつがれてきた民俗芸能ですが、果たして「はねっこ」「はねっこ踊り」と使われる言葉は、単独の踊りの名称なのでしょう、それとも、盆踊りのなかの動作の一部分の表現なのでしょう。

福島県南地方では、棚倉町近津、棚倉町八槻、古殿町竹貫、石川町野木沢、石川町山橋、石川町母畑、塙町川上、鮫川村赤坂、中島村川原田、矢吹町大和久、矢吹町根宿、白河市東釜子で「はねっこ」が踊られていたことが分かっています（江尻浩二郎『調査報告 ヤッチキ概論』）。

また、昭和45年に東京女子大学が塙町川上地区の盆踊りを調査。盆歌をすべて採譜しており、20～30年前に相馬地方の盆踊りが伝えられると、相馬盆歌の影響を受けて早い調子の盆歌が流行した。それを踊り方から「とびっこ踊り」とか「はねっこ踊り」とか呼んでいるという記述があります。

### 東白川郡の「はねっこ」

生田目ミツイさん（84歳）は塙の名倉生まれですが、終戦時は小学3年生でした。名倉では盆になると村中の人たちが薬師様に集まりました。若い男女3～4人のグループも、何組もがたった一晩のために装束をそろえて山の中のお堂に行きました。また、いわきのほうからは編み笠を背負って、鈴をつけ、袋をさげた装束の男たちが、午後3時になるとやってきて盆踊りに参加していました。「ヤッチキ ヤッチキ」と掛け声をかけていましたが、踊りながら飛び跳ねるので「はねっこ」とも呼んでいたそうです。ミツイさんも食べるものもない状況なのに、下駄がたちまち擦り減り割れてしまうほどに一所懸命踊ったといいます。その頃はみな信仰心が篤く、不動様や薬師様やお寺にお詣りし、淡島さまや旅行先などどんな集まりの場所でも、最後は盆踊りで閉めるほどに盆踊りは盛んでした。

八槻に嫁いでからも毎年踊り、唄の掛け合いはああ言えばこう言うように、悪口でもなんでも言い合っておもしろかった。笛や太鼓の演奏で名高いひとがいて、名人が叩くと踊りが浮き立ち、盛り上がってカッコいいのですごくもてたのだとか。八槻の男は浴衣を肩にかけ、自転車の後ろに女の人を乗せて塙の方まで行ったので、良い自転車を買うのに苦労したと夫から聞いており、盆踊りのあった青春が一番良かったと懐かしんでいます。

県境に近い矢祭町で育った男性（88歳）は、カンテラを下げて茨城までも行ったといいます。妹と二人で山を越えて出かけたが、よくも親が何も言わなかったものだと不思議がっています。あのころの若い人たちには地域を越えた交流があり、婚礼も行われたそうです。しかし、よそに行って踊るのは、昭和30年代で終わったのではないかと述べています。

小学2~3年ころから近津中学校の校庭で踊っていたという中野西ヨシノさん(83歳)は、毎年子どもセンターで盆踊りを教え太鼓も叩ける方です。八槻地区では大人も子供も老人も、老若男女がみな混ざってごちゃごちゃで輪になり、たすきをかけ尻を端折って踊り、活発でとてもきれいだっただけです。盆歌は相手の悪口を言い合いしながら歌うのですが、雰囲気口からつぎつぎ出てきて面白かったとのこと。青年団が何人も長い弓張提灯を持って歩き、お宮から丈六(じょうろく)まではひと廻り2時間ほどかかりました。ヨシノさんは毎日疲れているので今日に行くまいと思うのですが、太鼓の音が聞こえてくるとウキウキしてきて、買ってもらった新しい下駄を履き、浴衣を着てどうしても行ってしまったのでした。「はねっこ」も少し踊ったといいます。

何にでも積極的なヨシノさんは、山本不動尊での盆踊りにも仮装して参加し、酒一升貰ってきたことも度々とか。「おてんばなんだ〜」と、茶目っ気を見せてくださいました。

山本地区では仮装大会があり、ひょうきんで面白い人の仮装が皆に受けて、商品ももらって帰っていったそうです。ヨシノさんは浅川にも出かけており、その踊りは人を蹴っ飛ばす格好で、他人の足を踏みつける破れんぼうな、とっばい踊りだったと表現しています。また、鮫川の元気のよい若者たちが、白パンツにお祭り半纏を着て神社の境内で「ヤーハー」と言いながら時計回りに踊っていたことも覚えていました。

山本地区の盆踊りはひょうたんをぶら下げたり、しよい籠を背負って籠に「俺げに嫁に来る者いねか？」などの紙を貼り付けたりして面白かった。よそから来る人たちはいろんな格好をして、仮装行列で踊る人もおおく、地元の人はお揃いの浴衣で踊る。お盆に都会から帰ってきて、地元の若者と交流ができる良い慣習がなくなってしまったので、大事にして続けてほしいと佐藤功二さんは語ります。

八槻地区で踊っていた80歳代の女性は、盆踊りに行きたくて赤ん坊を夫に預けて出かけました。帰らなければと思いつついつまでも踊っていたくて、あと一回り、あと一回りしてから・・・と、なかなか切り上げられなかったそうです。雨が降っても着物の袂を頭に被り、しっぱねが上がるので尻捲りをして踊ったといいます。正調踊りは、手を肩にかけるように手の振りが大きく、手先や仕草がしなやかで、その様はとてもきれいだっただけのこと。

八槻盆踊りは昭和43年ころには盛んにおこなわれていて、今の国道118号線の道路の真ん中に櫓をたてて踊っていました。当時は大内宿とおなじく用水堀があり、家は今より奥に引っ込んでいたので、道路がもっと広い印象でした。踊りはじめは青年団が提灯をもって先導し、八槻神社側の寅卯屋(とらうや)から上六町の入口まで踊りの列がつづき、参加者が多くて輪が二重になったこともありました。八槻の櫓(やぐら)は二重になっていてとても立派だったそうです。

棚倉町での聞き取り調査では、城下は正調の踊りなので、「はねっこ」を踊る地域を、品がな

いと一線を画していた風潮があったこともわかりました。

### 白河市東釜子のはねっこ

「はねっこ」は、棚倉街道や石川街道沿い、白河周辺にも及んでおり、白河市では現在、東釜子（かまこ）地区において盛んです。江戸時代後期に始まった「釜子納涼盆踊り」は、毎年8月14日～16日の3日間開催され、各日の踊りの最後を締めくくる踊りを昔から「はねっこ踊り」と呼んできたと話するのは、地域の歴史にも詳しい我妻祐輔（32歳）さん。全体としてはゆったりした踊りがつづきますが、最後の15分は局が変わって太鼓のスピードが速くなり、激しくなると「はねっこ踊り」に変わります。太鼓は4人1組で交代しないと持ちこたえられないほど体力を消耗。その賑わいは「本当にすごいですよ！」とおっしゃるが、那須などの近県をふくめ、まさか、青森からやってきた人がいるほどの人気とは。

渡辺義信さん（59歳）も東のひと。「はねっこ」への肩入れが半端ないのです。「ヤッショ ヤッショ」と掛け声をかけながら、櫓の上から下からヤジが飛び、普通の盆踊りの時には人が少ないのに、「はねっこ」になるといっぱい集まり最高に盛り上がるそうです。

「とても激しい踊りなので、小1時間踊るのは体力的にもたない。物理的にはとても無理だけど、この世とあの世の人をつなぐ空間になり、トリップしたり、トランス状態が生まれたり、ランナーズハイのような高揚感や満足感、気持ちよさが得られて踊れてしまう。いつの間にか亡くなった先祖も踊りの輪に混ざり、釜子の人たちは、この盆踊りのために1年間生きているんだ」と熱く語ります。「あそこにいい娘がいる」と聞くと皆で押しかけ、釜子では、6月生まれが多いという都市伝説まであるとか。エネルギーな渡辺さんはもちろん毎年参加し、主催する釜子青年統一会の応援団でもあります。

### 復活した盆踊り

渡辺さんは中島村川原田（かわはらだ）の盆踊りについても教えてくれました。中島村では盆踊りが絶えて久しく、東日本大震災の年に復活させたのだといいます。川原田に続き、滑津原（なめつはら）地区も復活。

その背景には地域の役場OBが中心となり、地域活性化事業を実現させるために、大字（おおあざ）ごとに振興計画的なものを作って助成金が活用できるように手を尽くし、審査が通らないときには村が予算をつけるなどで後押しをする方策があります。

川原田の盆踊りは毎年8月13日に開催され、「はねっこ」も踊られています。ここでは審査委員がいて順位をつけ、同じ人が毎年優勝するのを避けるために、優勝した人は翌年審査委員長になるルールがあります。この事業は全国的にも注目されており、「お盆には皆必ず帰って来て盆踊りの会場に集まる。あそこに行けば〇〇に必ず会えるという楽しみがあり、懐かしさや賑わいによる高揚感に惹き寄せられて、村中の者が一か所に集まってくる。連帯感が強くなり地域の活性化につながっているのが素晴らしい」と称賛されます。ちなみにコロナ禍前の第3回目の優

勝者はなんと渡辺さんだったそう。

### 白河周辺の「はねっこ」

かつては白河市内でも広範囲に踊られていました。白坂にお嫁に来る前のとし子さん(81歳)は、若いころ関辺郷戸(ごうど)の八幡神社で盆踊りの最後に「はねっこ」が踊られているのを見えています。

緑川和子さん(90歳)も関辺の方。旧社村(きゅうやしろむら)ではハネッコを踊っており、金山(かねやま)小学校には100人くらいが集まっていて、前に行ったり後ろに下がったりして手を叩き忙しかったさまを思い出してくださいました。村中の未婚の娘が10~15人揃って今夜は金山、明日はどこどこと移動し、男は男でグループで出かけ、戦争上がりなので皆普段着で、バラバラの服装で踊ったそうです。五箇街道でも踊られていたように思うとも話されました。

鳴島あや子さん(71歳)の母親はとてもひょうきんで楽しい人だったそうです。なんにでも積極的で盆踊りも然り。自分から櫓の上に上がり、「おれが歌うぞい」と言って即興で歌詞を自作し歌いました。歌詞は恥ずかしい内容のようでみんなが笑うし、踊っても仮装しても目立つし、子供心に恥ずかしかったと思い起こします。

ひと夏をおもいきり楽しむ母は、歯がキラキラ、目もキラキラ、日焼けで黒光りした笑顔が今でも脳裏に焼き付いています。夫や姑に頓着せずに出かけるので、「いいの?おれらだけで行っても」と聞くと、「いいんだ。嫁に来た頃は、ばっばっかし出て行ったんだから。今度はおれの番だわい」と、私たち娘を連れてひと夏に五回くらい出かけました。「ほれ、お前らも踊れ!」と勧め、一緒に踊り通して、浴衣も帯もぐちゃぐちゃになり、裾もはだけてくたくたになって帰ってきたそうです。

また、叔父の話では、奉公先の旦那様が使用人のために、三味線・横笛・尺八・太鼓等を揃えていて、奉公人が悪い遊びをしないように、自由に使えるようにしてくれたそうです。ですから、大人になったときには、祭りや盆踊りにはひっぱりだこ。奥さんも盆踊りで出会った人だったと聞いて、「盆踊りは、本当に出会いの場所でもあったんですね」と話されました。

九番町の大高浜子さん(86歳)は太鼓の音があちらからこちらから聞こえてくると、みな道路端に出て、ひと夏に何度も踊ったといいます。近所の人たちと「あはは、あはは」と笑いながら通り五町で踊り、五箇に住んでいた吉田さんなどは表郷や棚倉までも行っており、あの頃の白河は心が豊かだった、とても懐かしい、とおしゃっています。

自治会の人たちが「踊っつお〜」「踊っぺ〜」というと、皆出てきて誘い合って道路で踊ったのがほんとうに楽しかった。遠くから聞こえてくる場所まではいけなかったが、白河パルプの広場や白河二小の校庭で踊ったと和子さん(91歳)。いま100歳になられる和田さんという方が、

歌も踊りも太鼓もなんでも上手で、「はねっこ」の先頭に立って踊っており、混ざって踊ろうと思ったが覚えきれなかったそうです。

緑川博子さん（88 歳）によると、市内では龍蔵寺が一番最後まで踊られていて、短い時間だったが踊りの最後に皆「はねっこ」を踊った。でも、ぴょんこぴょんこして早くて一周もしないうちに終わってしまって覚えられなかった。白河パルプには人が大勢集まりとてもにぎやかで、夕方3時ころから夜遅くまで踊っていたとのこと。

旗宿の渡部正さん（85 歳）にお聞きしました。旗宿では昔は通りに櫓を立てて、ぐるりと輪になって踊ったそうです。だんだん踊り手が増えてくると、道路が狭いので長〜い楕円形になって、ついには太鼓も歌も聞こえなくなるくらい遠くまで輪が伸びます。伸びた先でもまた誰かが歌いだすので、それはそれは賑やかだった。写真を探し出し「俺たちも若かったから、男同士、女同士で、白河の町中はもちろんのこと、今日は白坂、明日は東、次は棚倉、栃木・・・そして、いわきの方にまで行って遊んできた。みんな法被を着たり、襷をかけたり、その姿を見るとどここの団体かすぐに判った。若かったので、どちらかというとい盆踊りのゆったりした踊りよりは、「はねっこ」になると踊り出した。疲れるので2週くらいしか踊れなかったが、とっても面白かった。盆踊りの踊り方に似ているが、ちょっと変形した踊りが、はねっこ踊りなんだ」と、そう言って、踊って見せてくださいました。

「白河民舞愛好会」を率いる太田かずえさんによれば、昔はそれぞれの地区で盆踊りが踊られていたが、歌の節回し、太鼓のたたき方、笛のメロディーなどが微妙に違って、「この節は違うんだ」と現在でもいう人がある。地区ごとに特色があったが、いつの間にか混ざり合って変化し、特色が無くなってしまった。盆踊りはだら〜とした感じだが、「はねっこ」はすべての踊りの締めのようなものとして行われていたように思う。踊りのスピードが違うので、「はねっこ」の時に歌が歌われていたかどうか定かではないが、10年位前に踊られていた旗宿（はたじゅく）では「はねっこ」の時には歌われなかったといえます。

盆踊りは、人間的であることの原点であり、昔は縦社会の人間関係のなかで組織があり、地区を挙げての行事であった。普段の結びつきが大事で、世間が狭い分、年代ごとの会があるなど地域の結びつきが深かった。盆踊りは青春そのもので、その有様は生き生きキラキラと輝いていたが、今はそういう社会形態は認められず、青年団や婦人会、消防団などの組織もほぼ無形化してしまった。人が好きでなくなってしまう社会、テリトリーを侵されたくない社会になっており、盆踊りの復活はとても無理のように思うが、調査資料は後世に残すべきである。今調査をしないと覚えている人がいなくなってしまうので音源が欲しい。去年だったら歌える人がいたのにと言われることがあり、どうにかできないかと懸念されています。

**ポーンポーンと、ただ三日 くされ彼岸は、七日ある**

年季奉公に明け暮れ、働きづめの辛い日々。家に帰ることを許されるのは盆と正月だけ。

丁稚奉公や子守奉公、夫や舅姑に仕え従うばかりの嫁。待つて待つて待ち焦がれた盆の休みはあつという間に終わり、またいつもの忍耐の日々に戻ってしまう恨めしさ。

この戯れ歌には盆踊りの情景が鮮明に含まれています。生まれ故郷に戻り、知った人々、知らない面々、こもごもが顔をあわせて踊る盆踊り。無礼講の時間と空間は現実から逃避し、自分を解放できる特別な異次元の世界となったことでしょう。

休日だらけが当たり前の現代の我々には、昔の人々が盆踊りに寄せた想いの深さは、とても想像できません。時には古くからの民衆の歴史に思いを馳せてみても良いのではないのでしょうか。

## 民俗芸能

江戸時代後期に幕府の祐筆が諸国の風俗や習慣を調査した資料『風俗問状答』があり、現存する20余編のなかに『奥州白川風俗問状答』（文化11・1814年）が含まれています。

この資料には「降りつづきたる時晴を祈るには 所の鎮守などへ神主修験など参り祈念いたし 農人は村限り大勢集り 朝日の出るより日の入まで 鉦（かね）太鼓にて足をも休めず 念仏を申しながら立ち通しにて 或は輪にめぐり等して天道を祈り申候 実に田舎の風俗に御座候」とあり、現在の県指定重要無形文化財「さんじもさ」を含めた天道念仏踊（てんとうねんぶつおどり）がすでに踊られていたことが分かります。

白河市関辺における「さんじもさ（山神様の訛り）」は、稲虫追いの歌を歌いながら踊り、踊る姿は素朴でひなびており、最後に太鼓を乱打し、早打ち曲打ちでおえます。白河市根田の「安珍念仏踊」や「奥州白河歌念仏踊」、西郷村上羽太（かみはぶと）の「天道念仏踊」においても、踊りの最後にははしゃいで終わるのです。

## はねっこという表現について

今回の調査では「はねっこ」という盆踊りの由来や特徴を調べることで、できれば音源を手に入れることが目的でした。しかし、踊られている地域が珍しくなった昨今、コロナ禍の中での聞き取り調査は非常に困難であり、音源入手のみならず「はねっこ」（踊り）の定義も、「はねっこ」を固有名詞とする結果も残念ながら得られませんでした。

ある男性は、盆踊りは無礼講で活字にできない。見る人にとっては「はねっこ」は単なる盆踊りで、若い人がびよんびよん踊るだけで、「盆踊り」「はねっこ」と分けるような踊りではないと言い、多くの人が同じ見解を示しています。

そう、東京女子大学の調査でも述べられているように、速いテンポで足を上げたり、飛び跳ねたり、身体を回転させたりする盆踊りの一部の所作を、そのように表現したものと捉えてよいのではないのでしょうか。長い時間繰り返して踊っていると倦怠的になってくるので、そのようなときに賑わいを取り戻すため、「はねっこ」を始めたり、また、フィナーレを迎えると名残惜しくなり、力を出し切って盛り上がろうとします。ところどころに「はねっこ」が入るのは盆踊りの一つのパターンであり、そのクライマックスのアクションが「はねっこ」なのだと思います。

## 盆踊りの効果

聞き取りをさせていただいていると、高齢者といわれ活気を感じられなかった方たちの口数が徐々に多くなり、目を輝かせて若いころに親しんだ盆踊りがどれほど楽しかったかを語ります。その様子は、地域社会に根付いていた盆踊りという民俗芸能が、いかに人々の心底に侵入し、人々の暮らしを支えていたかにまで思いをいたすことができます。

人々の心を浮き立たせ、魅了してやまない「はねっこ」が含まれる盆踊りは、村社会が濃厚に根付いていた昭和時代までの、日本の夢のような時間でした。バーチャルの世界に捉えられ、人間同士の付き合いが希薄になってしまった現代社会の、損失が計り知れないほどに大きいことに気づき始めた日本人。

盆踊りなどの民俗芸能が持つ役割と影響は、人間にとって最も大切な何かを示唆しているように思います。コロナ禍が収束した暁には、ぜひとも集落共同体を軸として「はねっこ」を取り入れた盆踊りが踊られてほしいと願っています

## 取材協力（敬称略）

我妻祐輔 江尻浩二郎 太田かずえ 大高和子 大高浜子 金子誠三 衣山武秀 桑井トシ子  
近藤勝明 佐々木文子 佐藤功二 鈴木修 宗田理子 戸井田かよ子 土田富夫 中野西ヨシノ  
生田目ミツイ 鳴島あや子 橋本俊一 藤田喜作 緑川あや子 緑川博子 緑川祥昭 吉田幸子  
吉田美枝子 渡辺義信 渡部正（取材期間 令和3年2月～令和4年2月）

令和4年2月

安司弘子

（全国歴史研究会会員）